

令和3年度 美術の学校
「赤ちゃん&こどもアート鑑賞会」
開催結果報告

日 時：令和4年3月13日(日) 午前10時～11時、午後2時～3時

参加人数：0歳～小学生までのお子さんと保護者：37人

午前：子ども9人、大人13人、合計22人（8組）

午後：子ども9人、大人6人、合計15人（6組）

参加費：無料（保護者は特別展「貝殻旅行—三岸好太郎・節子展—」観覧料
1,000円が必要）

講 師：富田めぐみ先生

（NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事）

職 員：野田、長岡、丹野、名和

講師に、全国の美術館で赤ちゃんや子どものための鑑賞会や、造形ワークショップを開催している、NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事の富田めぐみ先生をお招きして、鑑賞会を開催しました。

対象は、0歳～小学生までのお子さんと保護者の皆さんです。お父さんと赤ちゃん、おじいさんおばあさん方とお子さん、お母さんと3人きょうだいなど、さまざまなグループの皆さんが集まりました。

最初に、富田先生のお話を皆で聞きます。床に座っても椅子に座っても、だっこしてもらってもOKの自由なスタイル。小学生の子は「どうして作品をさわってはいけないんだろう？」という先生の問いに「世界にひとつしかないから」と、答えてくれました。

赤ちゃんも、だっこの仕方によって絵を見やすくなるので、そんな解説もありました。



次に三岸節子コレクション展（常設展）「素描画の魅力」を皆で鑑賞しました。この展示室は広々としていて、赤ちゃんも気持ちよさそう。「好きな絵を見つけてみよう」の先生の呼びかけに、みんなゆっくりと展示室を歩き始めました。

だっこの赤ちゃんも、特定の絵を指さして喃語を発し、保護者の方に伝えようとしていました。「赤い絵を全部指さすみたい」と教えてくださった保護者の方もいらっしゃいました。

お話しできる年齢の子は、好きな理由を「木（があるから）」等と教えてくれました。

その後、特別展「貝殻旅行—三岸好太郎・節子展—」へ移動しました。他のお客様も多い中、「展示室でのおやくそく」を守って見ることができました。

「気になった絵はある？」との先生の問いかけに、三岸好太郎《裸婦》（1933年、個人蔵）をあげる子も。「はだかんぼ」というストレートな理由を教えてくれたほか、授乳期という赤ちゃんもこの絵に見入っていたのには納得です。

「他にお話ししたい人、どうぞ～」という先生からの声かけに、恥ずかしそうなお子さんも。「初めての場所でお話するのが難しいのは当たり前、社会性が育っている証拠なんです。きっと家で教えてくれますよ」と富田先生。ある保護者の方は「場所見知りだけど、ベビーカーの扉を閉めずに絵を見ていた。小さい



声で歌っていた。一緒に見られてうれしかった」と感想を寄せてくださいました。

最後に、講義室に戻って「記録用紙」にお子さんが気になっていた作品や様子などを保護者の方が記入し、来館記念フォトと一緒に持ち帰りいただきました。富田先生によると「記録用紙」は、お子さんが大きくなってから見返すと、「こんな作品を見てこんなことを言っていたんだ」「小さいとき美術館に連れていってもらったんだ」と思い出して宝物になるそうです。



全国各地の美術館での鑑賞や造形ワークショップを通じて、心の交流・意思疎通など「親子コミュニケーションの一助」となる取り組みを、長年続けていらっしゃる富田先生。今回鑑賞を通じて行った、子どもの反応をよく見て受け止め、共感したり答えたりするという親子コミュニケーションは、日常の中でも生きてくるものだと思います。美術館では今後も社会教育施設として、赤ちゃん・子育て世代を含めた様々な世代の方のウェル・ビーイングの一助となる活動を継続していきたいと考えます。(学芸員 野田)